

特集 「2014 年度人工知能学会全国大会（第 28 回）」

一般セッションとプログラム編成について

鷺尾 隆 (大阪大学)

一般セッションは大会 4 日間すべてにわたって行われた。今年から、大会を通じて一人 1 件の発表に制限した効果により、発表件数はほぼ昨年並みであった。しかし、オーガナイズドセッションの招待講演者には、自らの研究発表を他セッションで行う機会を保障するため、この制限を課さなかった。そこで、オーガナイズドセッションと一般セッションの時間帯重複を避ける工夫として、各日とも一般セッションを主に第 1, 第 2 セッション、オーガナイズドセッションを主に第 3, 第 4 セッションに配置した。一方、昨年は夜 20 時過ぎまで第 5 セッションがあり、参加者の疲労が問題となった。今大会では、学会総会の大会時開催の廃止、招待講演の削減、初日午前中からの開始などにより、昨年並みの会場数ながらも、第 5 セッションを設けずに講演数をこなすことができた。

例年と同じく、各論文は内容によって各一般セッションに振り分けられた。特に今回は聴講者の便を図るため、各論文内容を精査してきめ細かいセッションに分けたため、計 55 名称の一般セッションが構成された。表 1 に、それらを大括りしたセッション数と発表件数を示す。昨年と同じく、例年多い機械学習、エージェントに加えて、自然言語・文書処理の発表がさらに増える傾向にある。また、知識共有や教育支援の発表も非常に増えている。これは人工知能が、今後ますます人間との接点において用いられる可能性を、示唆しているように思われる。

さらに、二つの特別セッションが行われた。一つは「人間と調和した創造的協働を実現する知的情報処理システム」であり、これをテーマに戦略的創造研究推進事業 (CREST) が発足するのに合わせた討論が行われた。上記の発表傾向と符合する、有意義な企画と考える。もう一つは、昨年に続く「ロボットは東大に入れるか 2014

—総合的知的タスクとしての大学入試の利用」であり、東大受験ロボット開発の現況と展望が議論された。何れも、今後の人工知能の発展を占う刺激的な内容であった。

また、一般、オーガナイズド、近未来チャレンジセッションを対象に、例年と同じく大会優秀賞と速報論文推薦の選定が進められた。今大会では、セッション数の増大に伴う人員確保の難しさから、各セッションの専任評者を廃止し、座長と担当大会委員による審査体制を取った。この一種簡素化した審査でも、十分に質の高い発表、論文の選定が行えたと感じている。

ある一般セッションの発表風景を図 1 に載せる。例年どおり、大会全般にリラックスした雰囲気運営が行われ、参加者は伸び伸びと発表を行い、聴衆との質疑応答も活発であった。このように統一大会レベルで自由闊達な会議を実現している学会は、一部の小規模学会を除いてほかにあまりない。全国大会の参加者増加には、人工知能研究の興隆とともに、大会のこの雰囲気が大きく寄与している。今後も、この良さを維持、発展させてほしい。

最後に、松山大会でのセッション構成・運営の課題をまとめる。一つは、各セッションの聴講参加人数と会場規模のバランスである。前回の富山大会で、セッションテーマごとに参加人数を調査し、それに基づく予想聴講者数により、今回の一般セッションではほぼ適切な会場割付けができたと感じている。しかし、オーガナイズドセッションでは、オーガナイザに予想を任せられた結果、会場が狭すぎたセッションが多かった。これは来年に向けた課題である。二つ目は、大会規模拡大に伴う、プログラム編成作業の著しい増加である。一般セッション、オーガナイズドセッション担当の大会委員を増やすなど、体制の拡充が望まれる。今後、これ以上の大会規模になると、会場確保などさらなる課題に直面するであろうが、ぜひ、大会の自由闊達な雰囲気を維持してもらいたい。

表 1 一般セッションのセッション数と発表件数

分野名	セッション数	発表件数
自然言語・文書処理	10	48
機械学習	8	38
知識共有	8	37
エージェント	6	28
教育支援	6	28
ロボット	4	20
コミュニケーション	4	19
データマイニング	4	18
ヒューマンインタフェース	4	18
創発計算	3	15
ゲーム	1	5
認知科学	1	5
脳科学	1	5
推論・探索	1	5
社会応用	1	5



図 1 熱気に包まれた会場発表風景